温かいスープ (2)

今道 友信

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

まとまり1	まとまり2	まとまり3
戦後しばらくの日本の状況 国際的評価の厳しさ、みじめな時代	**国際性について考えさせる筆者の体験** 一九五七年、筆者はパリで大学の講師を務めていた。筆者は毎土曜、母親と娘が切り盛りする小さなレストランで夕食を取っていたが、月末にはお金がなく、オムレツだけ注文していた。 ところがある晩、娘さんのほうが、パンをそっと二人分添えてくれ、それ以後月末にはいつも二人前のパンが出るようになった。 二月のある夜、お母さんのほうが、注文を取り違えて余ってしまったと言って、温かいスープを差し出した。筆者は涙が落ちるのを気取られないよう、一さじ一さじかむようにしてそのスープを味わった。	**国際性についての筆者の主張** 国際性の基本は、流れるような外国語の能力、きらびやかな学芸の才気、事業のスケールの大きさではない。それは、相手の立場を思いやる優しさ、お互いが人類の仲間であるという自覚であり、その典型がレストランの母娘が示してくれた無償の愛である。 求めるところのない隣人愛としての人類愛こそが国際性の基調であり、それは平凡な日常の中で試されている。

確認テスト 教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うものを二つ選びなさい。

ア 一九五七年に筆者はパリで大学の講師を務めており、経済的に裕福(ゆうふく)な状態だった。

イ 筆者は毎土曜、小さなレストランで夕食を取っており、月末はオムレツだけを注文していた。

ウ レストランで接客を受け持つ娘さんは、月末にパンを二人分添えてくれるようになった。

エ 二月のある夜、レストランを切り盛りするお母さんは注文を間違えてオムレツを差し出した。

オ 国際性の基調である人類愛は、国際社会で海外の人々と触(ふ)れ合うときにのみ試されるものである。

〔　・　〕

(2) 次の中から、筆者が考える国際性の基本に当たるものを、二つ選びなさい。

ア お互いが人類の仲間であるという自覚。

イ きらびやかな学芸の才気。

ウ 事業のスケールの大きさ。

エ 相手の立場を思いやる優しさ。

オ 流れるような外国語の能力。

〔　・　〕

(3) 本文中の筆者の体験について、正しく述べたものを選びなさい。

ア パリのレストランでの筆者の体験は、戦後しばらくの日本の状況を説明するために示されている。

イ パリのレストランでの筆者の体験は、国際性の基調とは対照的な事例として示されている。

ウ パリのレストランでの筆者の体験は、国際性の基本の典型になるものとして示されている。

〔　〕